

総合的な学習をつくることによってひらかれた教員としての資質・能力 —子どもと地域が手を結び実現する夢・第四小学校の総合的な学習を通して—

高知市立第四小学校 野村 ゆかり

1. はじめに

4月からスタートした「総合的な学習の時間」（以下「総合」と呼ぶ）は、地域の特性を生かしながら体験をして学んでいくことを重視した学習をすることによって、「生きる力」をつけようというのがねらいである。

ところが、近年巷では、スタートしたばかりの総合に、学力低下論やゆとり教育不要論などが吹き荒れている。それに対して、教育現場では毅然と総合の醍醐味を語ることができず、混乱してしまっているように思える。

確かに、わたしたち教師にとって全授業時数の1/10とはいえ、教科書もマニュアルもなく、単元づくりをゼロからスタートさせなければならない総合は、ある意味で今までとは違った、新しい力量形成をしていく努力を続けられない部分はあるだろう。

また、総合をつくるということは、単にある部分の単元づくりをするというだけでなく、現存の教育課程を見直し、修正を加え、自前の、学校に根ざしたカリキュラム開発をしていくことになる。自前の、学校に根ざしたカリキュラム開発には、地域の切実な実生活にかかわる問題や解決を一人の陣限として堂とらえるのかという、教師の姿勢や思想が問われているように思えてならない。このように、実践にあたっての課題はたくさんある。

しかし、総合をつくることで、教師が常に自己刷新しつつ、子どもとともに課題解決をしながら共に成長していき、自分の一年一年の成長が実感できれば、これだけ生きがいややりがいのある仕事はないのではないかと思う。

私自身、今までの拙い実践を通して、総合は子どもも教師も大きな充実感、達成感が得られる学習であることを身をもって体験しているし、「総合で、子どもたちに自ら学ぶ力、生きる力をつけることができる」と確信している。それは、これから紹介する2年間の「龍馬学習」を終え、中学校へと巣立っていった、子どもの「総合でつく力」という題の作文が何より物語ってくれる。

ここでは、3年間に渡って研究主任・国語科TTとして子どもの学びを支え、地域や行政、ライオンズクラブ、上町そだての会などの協力を得て、子どもたちの夢が実現していくという総合の事例を取り上げる。そして、その時点では気づけなかった、自分自身の教師としての成長や研究主任として求められる力について探っていくようにしたい。

6年 T男

ぼくは、総合は社会に出ると一番必要な力を学んでいると思いました。たとえば、算数は計算とか一つの分野について学んでいるけど、早々は予算などを計算する面で算数、交渉などで社会、お礼の手紙などを書くことで国語と三教科も学んでいるからです。だから、総合はすべての分野の応用の授業だと思いました。

総合は、それ以外でも、(境界の)授業で学べない力もつくと思います。たとえば、京都の人たちとの交流でもてなされる気持ちがわかったし、上町の祭りでは、大人の人とのコミュニケーションがとれたので、授業以外の力もつくと思いました。

これからぼくは、この力を中学校に入っても、社会に出てからも、自分で計画したりする力をつけていきたいです。

2. 総合にかかわるまで

(1) 高知市立第四小学校に赴任するまでの実践から

これまでの自らの実践を振り返ってみると、教科以外にもタイムリーな話題を取り上げた授業をつくり、子どもたちは調べたことを懸命に発表しているのだが、調べることだけに満足し、自力で情報をつくり出そうとしていない。どこかが違う、本物ではないという疑問ばかりが残っていた。今になって気づくことだが、調べる学習や体験的な活動を取り入れたりはしているものの、子どもたちは、設定された課題をやらされている学習だったから、「生きたことば」になるはずもなく、ましてや総合固有の目標ともいえる「自己の生き方を考える」ことなどできようはずはなかったのだ。反省をもとにこれからは、子どもたち自身が課題をつくり、学習方法や表現方法を自己選択、自己決定する単元を作っていこうと考えていた矢先、高知市立第四小学校（以下、「第四小」と略記）への転任が決まった。

本校は、高知市の中心部に位置し、昔は城下町として栄えた地域にあり、今年創立130年を迎えた歴史と伝統のある学校である。北に高知城や江の口川、南に鏡川と比較的自然環境にも恵まれている。一時期は児童数が1,000人を超えることもあったが、ドーナツ化現象によって減少傾向が続き、2000年度では各学年単級となった。しかし、翌年から特認校制度によって、校区外通学の児童の入学によって児童数が増え、現在では1～3年生までが2クラスとなっている。

(2) 第四小での1年目（1998年度）

3年生36名の担任を受け持つ。単級は初めてであったが、中学年ブロックの協力体制が良く、総合を想定した単元づくり、地域の人材を活用した授業、幼・保との交流など、積極的に実践することができた。校務分掌では研究部に所属し、次年度から総合的な学習の研究をしようという働きかけを行った。年度末に高知市教育研究所の研究協力校になることが決定した。

3. 総合とかかわりはじめて

(1) 1999年度（1年目）——混迷期から方向性を定める段階

研究協力校に指定されたこともあり、職場の空気は総合的な学習について勉強してみようという気持ちであふれていた。本年度は研究主任になり、国語科TTとして3・4年生を担当していた。

年度当初は、早く第四小の目指す方向性を定めなくてはと思い、文献を読みあさったり、何校かの先進校の視察をしたものの、何かすっきりせず、逆に混乱してしまうような感じを受けていた。一口に総合といってもいろいろな考え方、とらえ方があるのだ。そんな中、「これだ」と感じたのが「はじめに子どもありき」の立場をとった総合だった。前述のように、子どもたち自身が課題をつくり、学習方法や表現方法を自己選択・自己決定する単元をつくっていききたいという考えと合致していたからだ。

夏休みに講師を招聘しての理論学習や単元づくり、2学期早々の先進校の研究主任による実践事例の紹介等の研修を行い、徐々にめざす総合について理解を図った。しかし、方向性を定めようと焦るあまり、気が付いたら独走していたということもあった。どうすれば合意形成を図れるかと悩むこともあった。殆どの教師は、授業実践事例を聞いても、聞くだけではイメージがつかめないし、単元づくりに労力がかかると消極的であった。最終的には理論と実践を授業場面と絡めながら共有化していくようにした。そこで、自分のかかわっている3・4年生を中心に実践してみることにした。本当は、全学年に平等にかかわっていききたいという気持ちもあったが、教師間の意識の差や抵抗があり、困難と判断した。今年は特定の実践者が総合を愉んでいるという姿をみってもらうことからスタートしたのである。それは、子どもたち同様、教師一人ひとりに新しいことにチャレンジしてクリアできたという成就感・達成感をもってもらえば、今までとは全く異なる質の授業の価値を理解してもらえ、総合の良さを知ってもらえるのではないかと考えたからである。トップダウン的に「総合は新学習指導要領で決められた、しなければならないもの。」ととらえるのではなく、ボトムアップ的に「総合って面白い。やってみると子どもが変わる、子どもの違った面がみられる。」と実感し体感してもらえよう、総合の単元をつくっていこうと心掛けた。

第四小の総合の方向性を決めるために、次の①～③のような地域や学校、子どもの実態・特性を踏まえて全体計画を立てていった。

①子どもの夢・願いを実現する

本校の総合で行う内容は、子どもの気づきや気がかり、疑問から出発し、夢願いを実現するために、問題解決しながら進めていくスタイルをとっている。それは、教師の側から提示した内容から活動を出発させるよりも、子どもの自ら学ぼうとする意欲を高めることができると考えているからである。そこで、教師の役割を「子どもの学びを支える、コーディネーター」ととらえ、地域の情報を得ながら地域と子どもを結びつけ、大人と共に夢の実現に向けてさまざまな問題を解決していくことができれば、子どもの内にあるポテンシャルを高めていくことができ、町の人たちとの輪もできるのではないかと考え、取り組みを始めた。

②龍馬を題材に、子どもたちを出会い達人・学びの達人に

私は常々、思春期までは親をモデルに子は育つが、思春期以降自分を育てる上で大切な生きるモデルになかなか出会えないことが子どもたちの心の揺れが大きい原因の一つと考えている。龍馬は、その生きるモデルとして子どもたちに出会わせたい人物の一人である。もちろん、第四小が彼の生

誕地にあるという単純な理由ではない。

地域の特性を生かした人づくり・人育てを考える中で、龍馬のことや龍馬を育てた上町のことを知れば知るほど、龍馬を題材に使わない手はないと考えた。でもそれはヒーローとしての龍馬ではなく、龍馬の学び方や生き方、地域の人づくり、人育てそのものが、これからの時代に求められる人間像と合っていると考えるからである。龍馬は出会いの達人、学びの達人である。人やものと主体的にかかわり、出会い、夢の実現のために必要なことを随時学び、社会とつながり、その度に大きな人間に成長していった。また、龍馬を育てた上町は、当時あらゆる職種のエキスパートが住んでおり、龍馬が学びたいことが専門的に学べるという、恵まれた環境をもっていた。さらに、現在では、その風景こそ高知城以外に城下町としての歴史性を失ってしまったとはいえ、何か城下町を感じさせる風情やあたたかさややさしさといった人情が残っている。これらを生かし、人とのかかわりを大切にして龍馬のような生き方、学び方を第四小の子どもたちにしてほしい、子どもたちが学びたいことが学べる環境をつくり出していきたい。そう願い、実践に取り組むことにしたのである。

まず、自分の足で地域を歩き、地域の現在の動きを知ることから始めた。そうすると、地域の情報を提供してくれる人々に出会い、耳寄りな情報をいただいたり、新たに情報を寄せてくれる人に出会うこともできた。人ひとりと出会うと、その人のもっている輪が次第に大きくなってつながっていったとでもいえようか。また、常に自らのアンテナを高くして、新聞や図書資料で地域に関する情報を集めるように心掛けるようにした。

③地域の人・もの・こと

子どもたちが龍馬を題材に学ぶ学習環境は次のようである。

○地域の中には、龍馬について研究したり、継続的にボランティア活動を行っている龍馬会、龍馬ファンクラブ、龍馬研究会龍馬ライオンズなどの組織がある。

○先祖代々、龍馬や近藤長次郎などを地域でよく見かけたということを語り継ぎ、現在もお話ししていただける人がいる。

○子どもたちが、数多くある坂本龍馬にかかわる史跡などを調べようとしたとき、公立図書館、記念館、自由民権記念館において、龍馬について学ぶことができるなど、大変恵まれている。

また、行政側でも龍馬を生かしたまちづくりをしようとする機運が高まってきている。しかし、地域住民の大半は、その動きをほとんど知らず無関心であり、子どもたちも校歌の歌詞に「坂本龍馬の生まれたところ」とあるものの、子どもたちは坂本龍馬や龍馬を育てた町である上町について学ぶ経験をしていないというのが実情であった。

④実践事例 3年生——「城西市場にからくり時計をつけよう」

1999年度から3年間、研究主任、国語科TTとして、地域の題材発掘、単元づくり、外部との交渉、準備や国語科として指導できることをコーディネートしたりして、担任のサポートをし、総合の実践を行ってきた。以下ではその事例を通じて、実践しながら気づいたことや強く感じたことを

紹介する。

実践を通して強く感じたことの一つ目は、結果の意外性ということである。

子どもたちと共に取り組む夢を机上で考えたとき、また活動を始めてからも、ゴールを想定して臨んでいても、予想をはるかに超える方向に発展していることが多い。教師が子どもたちに学び方を手取り足取り教える段階はあったものの、子どもの活動や学びに教育的価値をつけたり、方向付けさえしてやれば、子どもたち自らが伸びようとする力（判断力・行動力など）に支えられていく実感がある。

戦後、庶民の台所として親しまれてきた城西新興市場（闇市）が取り壊されるというニュースを聞いて取り組みを始めた。今のうちに子どもたちの心の中に市場の人の思いや願いを残しておきたい。新しい者の中にある古き良きものに会わせたいと活動していく中で、「ここは一つの家族みたいにみんながつながりつつあったのに離ればなれになるのがつらい」といった、仕出し店を営む山本さんの涙に出会う。市場跡が道路に生まれ変わっても、どうかして市場時代の良さを残したい。子どもたちは、新しく生まれ変わったはりまや橋商店街の見学から、市場跡にからくり時計を設置すれば「大きな家族を取り戻すことができるのでは」と考えるようになる。はりまや橋商店街の宮村さんから当時、全国的にも例のない「木造のアーケードを建てたい」という夢をあきらめず、その実現のためにいろいろな人を説得したという話を聞き、自分たちも夢をあきらめず、頑張ろうという気持ちを抱くようになる。県子ども夢応援事業に「城西市場にからくり時計を」と応募するが落選。一度は気落ちした子どもたちであったが、市長に自分たちの思いを綴った手紙を出す。市長からの返事が「子どもたちの話を聞きましょう」ということであったことから、子どもたちはプランを模型にして「こんな道路にしてほしい」と市に提案する機会を得た。

「木のベンチ、花などを置くことができるが、からくり時計は無理かも」という返事だったが、後に実現できることになり、市長はからくり時計のデザインやオルゴール曲の選定までも子どもたちに任せてください。午後3時の曲には「龍馬祭りに参加しよう」の学習で生まれた、「龍馬の夢」（作詞・作曲3年1組）という曲を入れてほしいという要求も取り入れてくださった。

2001年3月28日にからくり時計の除幕式が行われたが、子どもたちは山本さんからプレゼントされたTシャツ（子どもたちに勇気をもたらしたからという申し出）を着て、いつにもまして晴れやかな顔をしていたセレモニーの後、子どもたちはTVのインタビューに、「昔の城西市場の賑わいが戻ってきそうでうれしい」「これでやっと自分たちも城西市場の人たちの仲間入りができたような気がする」などと答えていた。子どもたちの心の中には、からくり時計というモニュメント以上に、自分たちの思いや願いがかなったという、満足感や達成感が強く残ったことだろう。

以上のような形で単元が終了すると誰が予測できたであろう。これには、地域の皆さんのご協力と行政側の粋な計らいが大きく介在している。

二つ目は、子どもたちの活動を暖かく見守ったり、支援したり、協力していただいている方たちのコンセプトが人づくりであるということだ。子どもたちに人と出会わせる場合、事前にその方々

に会って、今どういう活動をどういう目的でしているかをお話しした上でお話を伺い、「今の話を是非してください」とお願いしている。社会で情熱を持って活動している方々は、共通して次世代を担う子どもたちの夢を応援しようという気概をもっている。

(2) 2000 年度——実践期

本年度は、研究発表を控えているということもあり、全学年の生活科・総合にかかわりたいという希望を企画会で宣言して、研究主任と3～6年までの国語科 T T という立場になった。それとともに、研究主任を単に研究部のキャップというだけでなく、4部（総合学習研究部・同和教育部・生徒指導部・特別活動部）を踏襲する研究主任という立場にしてもらった。それは、「総合的な学習の時間」の105～110時間を考えるということにとどまらず、単元をつくっていくといろいろな視点での各部との話し合いや、すり合わせが必要になってきたからである。なかでも特別活動は、子どもたちと活動について話し合いをしながらすすめるので、総合と関連させながら実践することが多かった。また、この年は全員が研究部に所属し、あとの3部にも入るという体制をとった。また、全学年の単元づくりを全面的にバックアップできるように T T や専科教員を各学年に振り分け、一緒に単元をつくっていくという、協力体制をとるようにした。

学校としての方向性が定まり、各学年の実践が始まった。子どもと地域探検を行ったり、日々の生活の中で興味や疑問をもったことから、自分の夢を決定していった。

○実践事例 5年生——坂本龍馬について調べ、県外の人と意見交流をしたい

この年、強く感じたことの一つ目は、龍馬につながるネットワークで、子どもの夢がかなう素晴らしいしさである。

活動は子どもたちが「自分たちは坂本龍馬の生誕地に住んでいるから、龍馬が活躍した場所、眠っているお墓のある、京都の小学生と交流したい。修学旅行にもつなげたい。」と願ったことから始まった。中心とする活動をなににするかと子どもたちと話し合い、大人にも子どもにもわかるマップをつくらうということになった。龍馬に関する観光課作成のマップを集め、良い点、改善したい点を出し合った。そして、龍馬を育てた上町のことがわかるようなマップがないということに気づいたのである。また、「上町に住んでいるのによく知らない」「龍馬に関係している場所をもっと探してみよう」という声が拳がり、フィールドワークをしようということになった。最後にマップが仕上がったらどうするかと投げかけると、「龍馬に関係する施設ができれば置いてもらいたい」「観光課や龍馬会館にも置いてもらえるように交渉したらいい」などといった意見が出て、社会に通用するマップにしようということになった。

子どもたちの夢が決定した頃、上町の有志の方から「第四小の町づくりに関してバックアップをしたい」という申し出があり、昔の上町の様子やマップづくりに役立つ情報を数多くいただいた。子どもたちの夢から始まったことが大人を動かし、観光課を巻き込み、龍馬会、龍馬ライオンズクラブ、学校関係者等をメンバーとする「龍馬子ども交流事業」が発足したのである。その席で、10月28・29日に京都の高倉小の親子55名程度を高知へ招待することが正式に決定した。

二つ目は、子どもたちにとって、大人や仲間と活動する力、これが原動力となるということだ。

龍馬子ども交流事業や上町まちづくり委員会のメンバーのアドバイスをもとにグループごとに再度調査に出かけ、集めた情報を整理してマップを完成させた。交流会当日に出来上がったばかりの龍馬特ダネマップを手に、子どもたちは各ポイントへ出て、劇や踊りなどを取り入れ、京都の子どもたちの案内をした。実行委員会のメンバーや地域の方には、各ポイントに子どもと一緒にしてもらい、その案内ぶりを評価していただいた。自己評価だけではなく、大人に評価してもらうことで自己肯定感をもつことができたようである。

三つ目は、社会に広がり、役立つ実感がもてるということである。

子どもたちには地域・行政・関連施設など様々な大人の協力やアドバイスを得ながら、マップをよりよいものにしていこうとする姿が見られ、マップを数回手直ししたり、活動を見直したりした。6年生になり、完成した龍馬マップを自分たちが採用をお願いした場所へお礼のこぼや手紙を添えて届け置いてもらったことで、子どもたちの目標であった社会に通用するマップにするという目標は達成された。その後のゴールデンウィークには、高知駅まで乗り入れとなった土佐電鉄から高知への観光客に渡したいので置かせてほしい、市議会議員に配布したいなどとあちらこちらから依頼があり、社会に広がっていると実感した。

いよいよ子どもたちの夢であった京都への修学旅行がかなうときがきた。当日は、京都龍馬会の協力を得て、高倉小の子どもたちとともに近江屋、中岡慎太郎寓居跡、岬神社、土佐四天王像、土佐藩邸跡、酢屋という龍馬ゆかりの六ヶ所のクイズをしたり、説明を聞いたりする「龍馬ウォークラリーイン京都」で楽しんだ。子どもたちは、「いま自分たちの立っている、この場所に間違いなく、龍馬がいたんだ。ここの周辺を歩き、活躍していたんだと思うと、すごく感慨深かった」と感想を述べている。清水小では、龍馬や真太郎のお墓参りをしたり、清水寺周辺を地域の人たちとともに案内してもらい、人へのもてなしの心を学んだようだ。旅行終了後の作文には、「今回の修学旅行の学習は企画が盛り沢山で予定外に協力してくださった方もいて、大人の協力が大きいことを改めて知りました。」「古いものと新しい者が渾然一体となって京都らしさをかもしだしているなど感じました。自分たちの住んでいる高知もこうなってほしいと思います。」と感想が綴られている。

四つ目は、自分の住んでいる町、自己の生き方をふりかえることができることである。

昨年からの上町の有志を中心として、上町そだての会を発足させようという動きが出てきた。会の趣旨は、待ちに埋もれている多くの宝物（ひと、もの）や知恵を今一度掘り起こし、大切な待ちの宝物として育てていきたいと思い、教育上町に住んでいる人、その一人ひとりの「得意技」や「知恵」を自分のできる範囲で出し合い、「住みよい町」「生きがいのある町」に向けて、今一度育む心を集めたいというものである。準備会を経て、2001年7月に発足した。私自身、この会の支援隊として参加し、地域の歴史を学んだり、町の情報を集めたりしている。本年度の第四小の総合のバックアップをしてくださることになり、後述の上町の間地理でお世話になることになる。

(3) 2001年度——安定期 実践蓄積期

研究発表会を終え、どの学年も1年を通して総合を実践したことにより、「今年は〇〇をしてみたい」「〇〇と関連させたい」「〇〇と出会わせたい」などという声が聞かれ、教師一人ひとりに自信が少しついたように見える。これまで単元づくりに精一杯だった教師側の意識を、本年は子どもの学びを育てることと、単元で学びが育っているかをみとることに目を向かせたいと思い、評価に関して研究していこうということになった。

○「子どもの学びを支えるということ」

子どもの学びを支えるということはどういうことか、意味づけてみることにする。

それは一言でいうと、子どもの多様なニーズを適切に受け取り、そのニーズに応じて、地域のひと・もの・ことに出会える場を設定し、いろいろなものの見方、考え方、生き方にふれることができるようにすることである。

また、具体的には次のようなことである。

◇子ども一人ひとりの興味・関心・目的・必要・課題にそって、多種多様な図書資料や情報を活用し、多様な学習行動を自力でつくり出していくことができるようにすること。

◇一人ひとりの学習プロセスに即して機能・内容・資料を構成し、多様な学習活動が展開できるように構成すること。

◇今している活動は何のためにしているのか、どういう情報を得るためなのかという、かじとりをできる限り子どもと対話しつつすすめていくこと。

◇子どもの関心、意欲を強くする、問題解決のハードルを設定したり、しかけをしたりすること。

◇子どもの学びの過程をふりかえり、価値づけてやり、満足・自信につなげるようにすること。

さらに、2年間の実践で、コミュニケーション能力や表現力を系統的に育てていくことの必要性を感じていたが、本年度は、研究主任と1・2年生と6年生の国語科T Tという立場になった。今年も全学年の生活科と総合にかかわらせてほしいということをお願いして承認された。6年生は総合から発展した修学旅行も控えていたため、重点的にかかわることになった。

②実践事例 6年生——龍馬の情報発信基地をつくろう—みんなの集まる家をつくろう—

本年度「総合的な学習の時間」で取り組む夢についての話し合い、昨年からの上町・龍馬にかかわる学習が継続して行えるということで「家をつくってみんなの集える場所にしたい」という夢に決定した。また、家をつくる場所は「(仮称)龍馬の生まれた町記念館」建設予定の市有地であり、その龍馬の情報発信基地、交流の場の下地をつくりたい。町の人にもっと関心をもってほしいという願いがあった。昨年度、龍馬学習に入る前につくった活動のウェビングをもとに今までの学習をふりかえりながら、これからの学習を書き込んでいくと、「龍馬の脱藩に関することは学習していないから、社会科で詳しく学ぼう。」「先生、脱藩の道を遠足で歩けばいい。」と子どもたちから提案があり、これで龍馬学習の集大成ができると満足気だった。夢を表現していく過程で上町そでの会や地域の人たちとふれあい、かかわり、協力しあいながら、自分たちの企画をよりよいものにし

ていこう、これからの町づくりについて人の意見を聞きつつ、共に考えていこうと話し合った。

期日については、鹿児島・山口の小学生が来校する11月3日とし、お祭りをもてなしの場とする、龍馬を育てた上町のよさを体感してもらう、場所は市有地にするということになった。

7月5日、上町そだての会代表の方々と一緒に高知市議会第一会議室を訪れ、観光課、管財課、都市計画課、まちづくり推進課、学校教育課などの関係部署に次のことをお願いした。

「上町の市有地に龍馬の情報発信基地をつくりたいので、土地を貸してください。」

「祭りをするので、築城四百年祭で使った、寺子屋風の建物を貸してほしい。」

また、グループごとに自分たちの思いを発表した。

建物は移築費などで無理。土地も3日間だけという返事と安全への配慮など解決しなければならぬ課題はたくさんあった。しかし、限られた条件の中で自分たちのできることをしようということになった。

- ・上町に残る家を見学してイメージをもとう。
- ・上町らしい雰囲気を出そう。
- ・もっと上町の歴史を知ろう。

その後、上町そだての会の方々と一緒に企画会をもったり、地域住民に祭りの許可を取りにいったりした。子どもたちは調べる学習から展示物出典の準備を行い、当日に備えた。当日はあいにくの雨だったが、子どもたちになんとか祭りをさせてやりたいという大人の熱意が痛いほど伝わってきた。点との壁や床を何度も雑巾で拭いたり、ビニールで補強したり、朝早くから夜遅くまで準備や後片付けをしてくださった。

子どもたちもその思いに答えるように、祭りが始まると呼び込みをしたり、龍馬を育てた上町のよさを山口・鹿児島の友達や地域の人たちに体感してもらうために準備してきた昔道具、酒造り人形などの展示物や一弦琴演奏、発表を一生懸命に頑張り、抹茶接待など、もてなしの心でお客さんに接していた。山口・鹿児島の友達が一弦琴に興味を示し、自主的に大人や子どもたちに教わり、弾き始めたのを見て、満足げであった。初めての祭りということで、大人も子どもも反省点は多々あるものの、1・2年生もカボチャプリンやポン菓子を出品して、祭りを盛り上げてくれた。参加者も多く、思いの外賑わった。

11月4日は、龍馬子ども交流事業の一環で、桂浜の坂本龍馬記念館船中八策広場において龍馬ともだち会議を行った。薩長同盟の劇を子どもたちが演じたり、地域、学校自慢をしたり、西郷隆盛、高杉晋作、坂本龍馬について三校の学んできたことを発表し合った。

最後に、船中八策（まちづくり、自分たちの生き方に関して共同アピール）を作り、宣言した。

11月9日には、龍馬脱藩の道を葉山を愛する会（龍馬に関する）方の道案内で歩くという遠足を行った。保護者も参加し、龍馬に思いをはせながら、汗を流して歩いた。

これで、龍馬学習の集大成となった。

これまでの学習のふりかえり、自分たちが総合で身につけたと思う「力」をあげ、作文を書いた。

本稿の冒頭の児童の作品がその一つである。

これ以降も、地域の方との交流がつづいた。(仮称)「龍馬の生まれた町記念館」の企画段階に地域の声を聞くとともに、子どもたちの意見も取り上げてほしいというありがたい住民の方たちの要望があり、龍馬の情報発信基地にしたい、ここの交流の下地をつくりたい、龍馬学習を次世代へ引き継いでほしいという願いをVTRに記録し、地域に向けて発信できたことで、子どもたちは今年の夢も、ある意味で実践できたと感じていた。

さらに、家庭科で調理実習をして、茶話会を行うというときに、今までお世話になった方へ招待状を書き、グループ同士で交流し、会食を楽しんだりした。

卒業式にも21名を招待し、自分の将来に向けての宣言をしたり、自分たちの演奏を聴いてもらったりした。最後には、船中八策を地域に発信した。参加してくださった方に励ましのことばや心のこもったプレゼントを戴き、暖かく見守られながら晴れやかに巣立っていった。

(4) 三年間の実践を振り返って見えてきたこと

子どもたちは、からくり時計をつくろう、龍馬特ダネマップをつくろう、祭りをしよう、薩長士同盟をしようと活動しているが、城西市場跡や龍馬を育てた上町に注目し、町を調べ、いろいろな人と出会い、かかわってきた。そうすることで、自分たちの学んだ上町のよさや課題をもっと地域の人たちに知ってほしいと願い、情報発信していくことになっていった。それが一方的ではなく、双方向からになり、龍馬につながる大人たちとのネットワークができ、人の我ががどんどんひろがっていき、まちづくりにも影響を与えるようになってきている。子どもたちが地域の人から力をもらい、また子どもたちのエネルギーを地域の人に伝えることによって、確実に町は活性化していくという手応えを感じる事ができた。

実践するまで、自分自身が今まで感じていた学校から見た地域と地域、地域から見た学校と学校との感覚のズレを感じることも多く、大人も子どもも自分の思いだけではなく、周囲との折り合いをつけながらすすめていくプロセスを身をもって学んでいくことができたことが一番の収穫だった。

4. 研究主任＝TTとしてひらかれた力量

前述のように総合を実践していくためには、新たな力量形成が必要となる。ただ、こうした能力が必要だと知った上で形成しようとしたのではなく、実際に「授業づくり」を考えていると、従来の子ども観・授業観では対応できず、教師の意識改革が必要となり、授業によって子どもも教師も成長するというスタンスで「教師づくり」を考えていると、「学校づくり」につながっていったということである。いいかえると、私自身、あるいは教師一人ひとりが必要と感じながら自己刷新していったということである。総合と出会い、かかわることを通じて、教師の力量形成の質的転換を図る点において、総合がもつ大きな可能性を実感・体感した。

ここで改めて、研究主任＝TTとしての3年間をふりかえり、どのような力量形成がなされたかを考察してみることにする。

一つ目は、教師をサポートするということである。それまで比較的個業的な実践が多かった私にとって、子どもだけでなく、担任のよさを知り、担任の求めや思いを知り、両方の持ち味、発想を生かした単元づくりをする中で、どうコーディネートすれば子どもの学びを育てることができるかを考えたり、今自分がすべきことは何かと瞬時に判断し、サポートすることのできる研究主任＝T Tという立場は、実践上きわめて有効だったと思う。

二つ目は、全体を見通し、瞬時に判断することである。研究主任になった直後は、学校全体の組織の動きを知り、教育課程を熟知し、研究計画をたて、計画通り進めることで精一杯だった。しかし、二年目、三年目となると、今なにが課題なのかを瞬時に判断しながら、修正したり補充したりすることの大切さを学んだ。

教育界の動き、地域の動き、個々の教師の動き、子どもの動きを見とりながら、これを知ってほしい、課題だと感じたことをタイムリーに反映させる校内研修を企画する必要性を感じた。つまり、研究主任という仕事は、教師一人ひとりの意識改革、スキルアップを担っているということを改めて感じたということである。

三つ目は、カリキュラムづくりをリードすることである。前述のように、第四小の地域は題材の宝庫であり、題材を生かし、子どもの学ぶ場をコーディネートして、実践の蓄積をしてきた。ただ「さあ、実践してください」と丸投げしてできたわけではない。各学年が夢を決定し、活動に入る前にウェビングを書き、教育的価値を全教職員で討議し合ったり、活動途中に問題点を出し合い、方策を練ったり、年度末には成果を共有し合う校内研を行ってきた。それは、個々の実践の集合としてのカリキュラムということではなく、第四小のカリキュラムとしてどうか、ということを検討していきたいからである。教育目標達成に向かって、協働している組織の一員としての自覚と教師一人ひとりの力量を職場の教師や外部講師の助言によってひらいていく場として校内研を位置付けた。そういう場を企画しつつ、自らの力量も開かれていくことを実感した。しかし、まだまだ地域のよさを十分生かしきれなかったり、教育的価値を視野に入れたカリキュラムにしていくことができていない。これからも、最終的には地域や子どもの実態にあった、第四小ならではの自前のテキストをつくるという気概でカリキュラムづくりをリードしていききたい。

四つ目は、ネットワークをつくることである。

地域のネットワークは、年々広がってきたが、最初は自らが感じた疑問や気付きを追求していくうちに、地域の人・もの・ことに徐々に出会っていった。一人を知ればどんどん輪ができ、自分の内にこの題材を子どもに出会わせたい、かかわらせたいという願いが湧いてくる。それを子どもたちが学びたいという時まで醸成させておいて、動機づけができると学習の場として設定する。地域を学ぶことによって、子どもたちは、地域に目が向き、地域のよさや課題に気づき、共感し、自分も地域の生活者の一員であるという自覚をもったり、誇りと愛情をもち、さらによくしていこうという気持ちをもたせることができた。これは、教師である私自身も共有できたように感じる。

ただ、外部の人が学校を開いていくという側面もあるが、学校に対する思いが強いあまり、調整

が必要な場合もあった。留意すべきことは、学校側がこういう意義、目的で行っているということをしちゃんと伝えるということである。

五つ目は、説明責任に応えることである。

地域や保護者の不安材料である「総合ってどんなことをするの」「総合でどんな力がつくのか」という声に応えるために、総合日より「おとめ」を発行したり、本校の実践を積み上げ、総合で育てたい力を内用編成表に表したりした。編成表や学習指導要領をもとに、単元の教育的価値をつけ、説明責任に応え、教師たちに安心して実践してもらえるようにした。そうしているうちに、授業観の転換は単に総合にとどまらず、子どもたちから教科においても「〇〇について話し合ってみよう」「〇〇をつくって〇〇したい」という声上がるようになり、教科の中身も自ずと見直していこうという動きが出てきた。それが、次年度は子どもや地域の実態に合ったカリキュラム開発、再編成をしていこうと新たな動機づけを生むことにつながった。

今まで、自分が研究主任＝TTとして、どのように成長してきたかを振り返ってきたが、総合が必要とする資質・能力について以下にあげる。

*問題発見力	*探求力	*リサーチ能力	*外部人材・題材発掘	*活用力
*単元開発力	*交渉能力	*瞬時の判断力	*企画力	*調整力
*プレゼンテーション能力	*ネットワーク力	*情報収集力	*応用力	
*危機管理能力	*人間関係調整力	*行動力	*先見性	

以上が新しく求められる資質・能力かといわれるといささか疑問ではあるが、わたしたち教師が担っている「生きる力」の育成は、教師一人ひとりに求められているように思えてならない。

5. おわりに

今年度は、研究主任は変わらなかったが、2年生の学級担任になった。久しぶりに子どもたちと日々活動していくのは楽しいし、確かに喜びややりがいはある。しかし、正直言って物足りない。学級担任がいけないといっているのではない。ただ、昨年までの3年間の研究主任＝TTで実践してきたような満足感や充実感は得られないということである。5年前の自分だったら、学級担任にやりがいを感じていたし、級外になることなど考えたことすらなかった。4年前、市の指定を受けて「総合的な学習の時間」について研究発表会をするにあたって、学校の進んでいこうとする方向すら定まっていなかったのが、研究に専念するためあえてこの立場を選んだのである。だが、実際にやってみるとやりがい・生きがい予想以上に大きく、今まで感じたことのない充実感・満足感が得られた。私自身のキャラクターによるところも大きく、総合・カリキュラム開発という新しいものに挑戦していくことで、知的好奇心や意欲がかき立てられたということもあるだろう。また、得意分野が活かされたということもあるだろう。国語科を受け持ち、全学年のうち3つないし4つの学年にわたる国語科で、コミュニケーション能力を育てることに力を注ぎながら総合ができたこ

とも意義が大きかった。その上、全学年の生活科や総合にかかわっていたので、活動内容を知った上で、実践しながら見えてきた教科の不十分なところを補ったり、総合の単元の前に国語科の内容を入れたりして連携することができた。たとえば、メモの取り方、要約の仕方、手紙の書き方、新聞の作り方などである。学校全体を見通して、総合を支える力を育成していくことのやりがいも感じていた。

さらに、これからの先の自分の仕事に対する願いは、教師一人ひとりの力量形成の支援がしたいということにある。ここに一番の喜びを感じるようになっていく自分に気づいている。

これまで研究主任＝TTとして子どもの学びをコーディネートするという役割について述べてきた。自分なりの結論としては、学級担任を兼ねていては、これまでの3年間のような実践を継続的・発展的に実践することは難しいということである。過去の例でいえば、県外校との交流や修学旅行の際、現地を訪れ、この学習は子どもたちのこういう願いでスタートし、こういう交流をしたいと考え、活動していると説明し、理解してもらったということがあった。また、行政側へのお願いやイベントの打ち合わせに行ったりと、外部交渉が多岐にわたる琴が多く、とても校内にとどまることができなかった。このようなことは学級担任では無理があり、自分の学年の範囲内でとどまってしまう、学校全体としての活動となると難しい。

「野村さんの考えているようなことをするのだったら管理職よ。管理職を目指したら。」とよく言われる。果たしてそうなのだろうか。現状の管理職の仕事は、事務的で対外的なことが多く、教育内容に直接かかわれることは少ない。むしろ、研究主任を校務分掌上、一つの職として独立させる必要性を感じる。もちろん、私の周りにも学級担任をしながら研究主任をしている人は多く、現状に満足している人もいる。しかし、教師一人ひとり、生きがい・やりがいを感じることは違うはずである。たとえば、私がイメージしている職として近いのは、徳島県海部町の「ふるさと教員」である。地域のさまざまな分野で卓越した人を捜し、講師に迎え、学習プログラムを組み、地域のことを学習する支援を行う教員のことである。町費で教員を採用して学校に張り付けると、継続的な指導ができるという考えから生まれた制度である。高知市にも地域教育指導主事がいるが、高知市の小・中学校57校に一人であり、まして教育委員会に張り付きなので、なかなか一校で活用することは難しい。

この「ふるさと教員」と研究主任を兼ねるということが私自身の理想ではあるが、制度化は難しいだろう。しかし、これからますます学校において校内研の充実によって教師の力量形成を図ろうとする動きが増していくならば、教育研究的な立場で中堅教員が納涼を発揮する場や職として、何らかの形で認知されるよう、早急に制度化を求めたい。

龍馬関係ネットワークのできるまで

《 1999年 》

4月ごろ 地域、関係者に向けて人材/バンクの整備要請

① 総合活動（全校講師班で体験学習の学習）のウェブサイト

② 龍馬ウェブサイト
龍馬の学習に関する人的、金銭的な協力
要請 → 坂本龍馬に関する図書、資料贈呈

6月ごろ ③ 土佐伝説の森ウェブサイト
龍馬ウェブサイト（総合活動）
岩崎綾香さん 協力① ② ③

④ 北村静子さん
P
地域の情報提供、ボランティア

⑤ 龍馬ウェブサイト
P
龍馬の学習に関する援助
全国龍馬サイトの集い出演依頼

⑥ 龍馬会
P
会長 橋本邦健さん

龍馬の里 龍馬の里歴史館

龍馬博物館

土佐伝説の森

土佐伝説の森

龍馬研究会 など

龍馬生家復元にかかわるまちづくり

⑦ 龍馬生家復元検討委員会
P
代表 西森啓史さん

《 2000年 》
⑧ 上町コミュニティ会
P
まちづくり

⑨ 上町町内会連合会

⑩ よさこい龍馬組

⑪ 乙女企画

⑫ ホテル南水

⑬ 城西館

5年生使った図書・資料

土佐の巨星（第一法規）

坂本龍馬（ポプラ社）

（国土社）

学習漫画 坂本龍馬（集英社）

おーい龍馬（小学館）

坂本龍馬・青春時代（新人物往來社）

近藤長次郎（毎日新聞社）

高知の有名な人（高知新聞社）

NHK その時歴史は動いた

6月9日放送
11月15日放送

坂本龍馬暗殺（VTR）
（VTR）
など

夏休みに利用した場所

龍馬歴史館

県立歴史民族資料館

坂本龍馬記念館

市民図書館

県立図書館

自由民権記念館

出合ったひと

土佐観光ボランティア

龍馬ライオンズクラブ

北村静子さん

建築士龍馬会

上町コミュニティ会職

龍馬ウェブサイト

龍馬会

龍馬研究会

自由民権館学芸員 山村さん

市民図書館学芸員 足達さん

龍馬郵便局

城西館

ホテル南水

高知市観光課

乙女企画

市役所文化体育施設建設室
千頭さん

龍馬会
筒井さん

上町町内会連合会

高知市 都市計画課

龍馬生家復元検討委員会

野村ゆかり：総合的な学習をつくることによってひらかれた教員としての資質・能力

▽ 本 類 ▽

《 2001年 》

⑭ 上野啓史さん

上町の秋の行事

11月4日(日)第14回東西小学校区地区長運動会が、晴天のもとにぎやかに開催されました。優勝は東石立町チームでした。



9月16日(日)城西館に於いて、上町地区委員会が開催されました。当日は130名あまりの参加者があり、大盛況のうちに総会を終りました。

＜町そだて＞の取り組み

「まち」を育てることが「ひと」を育てるという「町そだて」を目指す取り組みとして、子供たちの町そだてへの参加を通して「まちの盛り取り」としての人材育成を行う。また上町の歴史や文化財産を盛り起こし、上町らしい「町そだて」を行います。

歴史を盛りこむ
上町にある歴史や人財などの文化財産の盛りこむ活動

人づくり
学校の子供たちの社会学習への協力

街並み
商店街、祭りづくりの活動、ワークショップの開催、子供連帯づくり活動の開催

育し
「上町のよき」を育むための取組、上町の人が自然に誇れる町そだて

かわら版
上町のかわら版(上町の町報誌)の発行

上町に関する写真や情報・かわら版に関する記事をお待ちしています。

*かわら版の欲しい方は下記にご連絡下さい。

問合せ先は

高知市上町そだての会事務局

福田 TEL088-875-4702 FAX088-822-8770

マブ TEL088-872-1040 FAX088-872-1040 マブ

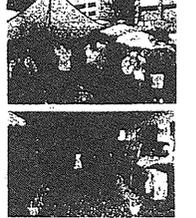
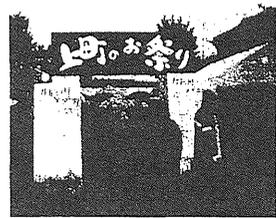


町そだてかわら版

平成13年冬号
発行高知市上町そだての会

上町のお祭り

「上町のお祭り」は平成13年11月3日(土)の文化の日に関開された。「水鏡の川」にもっと関心をもって欲しいという西小学校の子供達のたのびの希望で旧水鏡町2丁目の市有地を高知市から借り、いろいろな皆さんに助けを借りて、初めてのお祭りを開くことが出来た。文化の日には晴れど、雨も降った。それを期待していたにもかかわらず当日は生憎の雨。それまで暑い日だった気温も急に下がり、寒い雨の中の厳寒のお祭りとなった。城西中学校と第六小学校にお借りしたテントをすべて広げ、午後3時おみこしでオープン。西小学校の子供達が作ったかぼちゃのプリン、パウンドケーキ、焼きそば、めだかの団子、めだかのキーホルダー、上町そだての会による焼きそば、フランクフルト、おでん等など、「いらっしゃい!いらっしゃい!」の掛け声で賑わうように人が集まり、テントの中での賑わいで祭りの雰囲気づけがされた。子供や保護者による抹茶の接待、一柱舞の演奏、パソコンによる上町のマップ説明、区の協力による団子づくり、音道具の展示、バルーンアート等盛況山で、子供連帯で下された方達は雨の中を歩いた。テントの壁には子供達が祭りの町並みを描いており、雨で降ったとらと本意に残念だった。一番の人気テントは駄菓子屋さんで、子供連帯だけでなく大人達も子供に誘われて楽しんでいた。夜は花火が繰り出されたランタンにペンライトが輝き、ひととき楽しかった。祭りの締めには上町在住の「星の関さん」にお話していただき、壮大な宇宙の話で一時夢を見させていただいた。雨の中のお祭りだったが、楽しいだけでなく、計画が狂ってしまったこと、アイディアのりきる夢、参加の困難、忙しく、そこから生まれてくる喜びなど、私達だけでなく西小学校の子供達にも、参加した人達にも、何かに気づいたことと思う。



★上町の星★

「新しい星を見つけた!」「日本の名をつく星を宇宙に見つけた!」という少年の頃の夢を追いつけ、200もの小惑星を見つけた関 勉さんはこの上町・旧水鏡町生まれ。育ち、そして今も住んでいます。夜中の3時に起きだし、上町にある自宅の物干しの上で「新しい天体を発見する」という夢を遂げ、19年もの、何年もの夢を見つけたそうです。高校2年の頃、あこがれた大先生に手紙を書いた所、いただいた返事で励まされたことが、くじけそうな時の支えになったと賞います。関さんの人生を決めたのは「イクワ・セキスイ星」の発見だそうで、疑問、貴望を確切って太陽の中へ突っ込んだそうです。新しい星は発見されたら、直径100億という太陽の中へ飛び込んだら蒸発して消えてしまう。発見者としていつまでも自分の見つけた星は宇宙で生きて欲しいと願った関さんは泣いたそうです。所が辛いことに太陽の表面をこすただけで1ヶ月後に再び見つけたら、この星は外国では切手にもなったそうです。新しい星は発見者の名前がつく。小惑星は発見者が名前をつけるそうです。だから関さんが見つけた200余りの星のうち100余りの星には関さんが好きな名前をつけて、残り100余りはまだ名無しだそうです。上町、土佐川、豊山、笠戸、足指、四万十川、仁淀川、石見山、こんな星々が宇宙をまわっているのです。こんな土佐や川の名前だけでなく、竜馬や寺田実彦、佐野嘉次郎、夏目漱石なども世界的に記録され宇宙をまわっている。どこにあるかわからないが、ひょっとして「上町」という星をあなたも夜空を見上げたら見ているかもしれない、と思うと現在のせせこせとした毎日にも爽やかな気分が出るというものです。

(上町のお祭りの中での関勉さんの話より)

×楽しかった上町のお祭り×

当日参加した西小学校の子供達の声です。

「お祭りをする前よりかわかりがよくなったと思います。会場をみてみるとお年寄りや子どもたちが結構話していたからです。地域の人々の協力があってこそできることがわかりました。中略人のかかわりも喜ぶのみにして少づつ元に戻っていると思いました。」



みんなでお祭りをするため、準備をしました。

「わたしたちも楽しんで、大人も子どもにも関わって楽しんでました。この祭りは、6年間ではばんに続きました。」



一柱舞の演奏



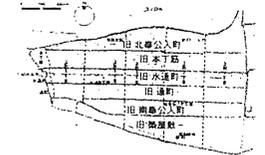
子供連帯



「みんなすごく交流が好きだということ楽しそうに生き生きしていたのが印象的でした。こういう交流をすることで、上町の人ももっと上町のよさを知れてくれるし、竜馬のことも自慢できると思います。こんな上町が大好きになりました。」



バルーンアート



上町 町名今昔 その武

北条公人町(きたほうこうにんまち)
江戸時代、中間、下代など武家に召し使われる人(奉公人)が多く住んでいたこと由来する町名。もとは内町といわれ、下駄武士も居住していたが、慶安二年(1649年)野中兼山により町割が行われて北条公人町と改められ、武士が江戸川をはさん

本丁筋(ほんちようすじ)
江戸時代は上町本町といわれていたが、明治に入り高知本町との混同をさけるため、本町に続く通りという意味で本町筋と改められ、昭和に入り本丁筋となった。城下町建設のとき最初にできた城下経営の基本道路で、他国往來の幹路でもあり、西端の思案橋は広小路になっており、番所があった。通りには土佐の三